

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

父の死後、母・兄と共に東京から大阪へ家族で引越した俊夫は、クラスになかなかなじめずにいる。天体観測が好きな兄を持つ俊夫は、ある夜、兄と共に町のはずれの高台に登り、望遠鏡で星を見ることになった。

二人で望遠鏡をかついで斜面に登る。一〇分も登ると、昨日の雨で濡ったカヤが足にまとわりつき、^①露がくつ下をつき抜け、足の指の間でうずくまった。

頂上に着く。兄が望遠鏡を組み立て、スバルに合わせ始めた。

ぼくは、「季節の星空」という本を開いた。懐中電灯をつける。おうし座の肩にあたるスバルは今の季節は東の空にあると書いてあった。

「見えたぞ」

兄がスバルをつかまえたらしい。「ホラ」といつてかわつてくれる。

「いくつ見える？」

「一つ、二つ、三つ、うーん一五ぐらいかな」

目で見ると、スバルは六個ぐらい見える。この望遠鏡を使えば、二〇個ぐらいは見えるはずだ。

「兄ちゃん」

思わず、望遠鏡から目を離さず大きな声を出した。

流星だった。

兄が黙りこくつたまま地面にしゃがんで空を見上げている。

天の頂上あたりにカシオペアがあった。じっと見てみると、Wが見えてくる。そして、体重がふうつと消えていくように感じる。宇宙に二人だけ取り残されているような気がした。

不意に転校した学校のことを思い出した。東京から来たこと。言葉が違うこと。なにかとうと「東京」とバカにされる。ぼくのことを学校のヤツらはなんでも気に入らないらしい。

「俊夫、学校で友だちが出来たか？」

平成二十二年 度 曉星国際中学校 国語 入学試験問題 その二

に届く。宇宙は巨大なアルバムだ。ぼくらは宇宙の隅っこに^④わけじゃない。ぼくは「勇気」を取りもどした。

※注 光年：光が一年間に進む距離をあらわす単位。

問一 線部①「露がくつ下をつき抜け、足の指の間でうずくまった」とありますが、ここで用いられている表現技法と同じものが使われている文として、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア、お盆のような月が出た。 イ、心に寒い風が吹きあれた。
ウ、見たまえ、空を。 エ、石はだまつている。
オ、ほめられて、自信たつぷりのぼく。

問二 線部②「スバルをつかまえた」とありますが、これはどのように言いかえられますか。文中の語句を用いて、十字以内で答えなさい。ただし、句読点はふくみません。

問三 線部③で「うん」といおうとしているのに、線部④のように涙が出てきたのはなぜですか。「うん」という言葉の表す意味とあわせて四十字以内で説明しなさい。

問四 1 3 に当てはまる会話文として、最も適切なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、シリウスって一番明るい星だよネ イ、アラビア人ってすごいなあ
ウ、父ちゃん帰ってこないかなあ エ、シリウス、うん
オ、八・六光年なあ カ、ぼくも天文部に入ろうかなあ

問五 4 に当てはまる最も適切な語句を、十字以内で文中から抜き出さなさい。
問六 線部⑤「ぼくは『勇気』を取りもどした」とありますが、これはどのような「勇気」ですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア、仲間に入っていく勇気。 イ、父の死を乗り越える勇気。
ウ、宇宙の星を見続ける勇気。 エ、大人への歩みを始める勇気。
オ、家族を支えていく勇気。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一段落 森の宗教の思想について、私は長い間いろいろ考えてきたのですが、結局、それは生きとし生けるものはすべて共通の生命で生きている、そしてすべて成仏することができるといふ考え方だと、最近思うようになりました。動物の命も植物の命も、山や川すら成仏できる。

③ 兄が出し抜けに訊いた。

「うん」といおうとしたが、急に訊かれたのでノドがつまってなかなかいえない。なぜだか涙が出てきた。

「いじめられているのか？」

兄が重ねて訊いてくる。

鼻をグスグスンいわせながら、それでもなんとか「違う、違う」というと、よけい涙が出てくる。

「そのうち、友だち、出来るよ。仲間に入ろうとしなきゃ、だめだよ。誰か気の合いそうなヤツいないのか。星を見るのが好きなヤツとか。この望遠鏡、学校に持っていっていいよ。友だちに見せてやって、おまえの知っている星の話、してやれよ。オレは、三年になったら天文部の部長になれるっていわれてんだ」

兄が笑いながらいった。

「天文部の部長！ すごいよ、兄ちゃん」

涙がとまった。

「もうすぐ、シリウスの季節だなあ」

兄が東の空を見る。

1

「来月になるとシリウスが東の空に顔を出す。砂漠のアラビア人はシリウスを『千の色の星』とも呼ぶんだ。見ている間に、青、白、緑、紫とプリズムみたいに色を変えるから」

2

「そうさ。でも、直径は太陽の二倍しかない。地球からの距離が八・六光年で、日本から見える恒星では最も近いから明るく見えるんだ」

兄の力強い話し方はまるで死んだ父そっくりだ。

3

八年前といえば、まだ父が生きているころだ。その時シリウスを発した光がもうすぐ地球

そして成仏するばかりでなく、生きとし生けるものはすべて生死の間をじゅんかんしている。

生きとし生けるものはすべて死ぬ、そしてまた生き返るのです。どのようにして生き返るかという、また子孫になって生き返ってくる。昆虫は一年生きていれば次の年に死んで、また次の子孫が生まれてくる。トンボもセミもそうですね。人間だって同じことなのです。みんな生きとし生けるものは、生と死の間をじゅんかんしている。

二段落 こういう考え方を芭蕉は「月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり」と表現したわけです。芭蕉は日本人の世界観をよく知っていた。月日も星も宇宙も旅人だ、そしてみんな永遠の精神を伝えていくのだという考え方です。太陽もそうです。太陽も一度、死ぬのですね。そして朝になると生き返る。だから、太陽は神であり、われわれは朝日を拝むのです。

これは旧石器時代以来の人類の世界観でもあった。

三段落 そして、森の文明の考え方の基本は、「生命は一つだ」ということです。実はこのことは高度に発達した自然科学によつて証明されています。現代の生命科学は、最後にDNAを発見したわけですが、DNAは人間にも動物にも植物にも共通にあることが分かった。これは生命は一つだということの何よりの証明です。旧石器時代以来の考え方が科学的に実証されたのです。

人間は生死を繰り返す、そして個体は死ぬけれども、遺伝子は永遠に生き残るのです。それが人間の永生なのです。人間の永生を遺伝子科学が証明したわけです。

四段落 そういうふうになると、植物や動物の命を尊敬して天地自然を尊敬する、そしてその天地自然や動植物と調和して生きていく、共生する方法をわれわれは考えなければならぬのです。それが人類の知恵である、というふうに思わざるをえない。人間は動物や植物を殺さなくては生きていけない面があります。木は信仰の対象だけではなくて人間に最も役に立つものである。だから木を切るにせよ、動物の命を奪うにせよ、われわれと同じ命を持った木を、そして動物を殺すわけですから、その木や動物の霊を手厚くあの世に送らなければならないのです。霊をあの世に返さなければならないのです。そしてまた木や動物たちにこの世に帰ってきてもらわなければならない。私は、こういう宗教を今こそ取り戻さなければならないと考え

